

「戦争の怖さを知って」

鈴木 まう

八月は嫌いだ。大好きな高校野球を観ていても戦争をしていた時代の映像が流れたりする。戦争は怖くて、悲しい。戦争のテレビも怖いから観ないようにしている。怖くてかわいそうで涙が出てしまうときもある。

ある日の朝、新聞をめくると、見覚えのあるおじいさんがうつっていた。親せきのおじ

いさんだった。「戦後七十八年福島の記事」として戦争の体験記の取材を受けたようだ。そのおじいさんが戦争に行っていたなんて知らなかった。何度も会ったことがあるが、誰からも聞いたことがなかった。怖いと思ったけれど勇気を出してその記事を読んでみた。当時十六歳だったおじいさんは奈良海軍航空隊の甲種飛行予科練習生として訓練に臨んでいた。朝早くから厳しい訓練を受け、午後からは防空壕造りに駆り出された。訓練中に米

軍戦闘機の機銃掃射に遭い、トラックを運転
していた海軍の兵隊が目の前で銃弾を受けた。
運が悪ければ自分もやられていた。と七十
八年たった今も凄惨な光景が脳裏から離れな
いそうだ。

小学生のころ、フィールドワークで飯盛山
に行った。その時、十六歳や十七歳の少年た
ちで構成された白虎隊の悲劇について勉強し
てきた。私たちと同じくらいの少年までもが
戦争に参加してたくさんの命がうばわれたこ

とを知って胸が苦しくなった。しかし、わす
か七十八年前にも中学生たちが日本の国のた
めに軍に入隊して戦争に参加していたのだ。
調べてみると、予科練習生は志願制ではあっ
たが、募集にはノルマがあり、学校や村から
志願を呼びかけられたそうだ。もし自分がそ
の時代に生きていたらと考えると恐ろしい気
持ちになる。戦争はずっと昔のことですっ
と遠くで起きていたことだと思っていたけれ
ど、現実はどうではなかった。

終戦から七十八年が経ち、戦争を経験した人たちの高齢化に伴い、記憶の風化が進んできている。今の日本が平和な理由は、その苦しかった時代を生き抜いてきた人たちのおかげだと思う。戦争の話は怖いけれど、今、私ができることは、勇気を出してもっと戦争の怖さを知ること、そして、今、戦争が起こっていない日本に感謝することだと思う。唯一の被爆国である日本に生まれた者として、戦争の恐ろしさを知り、後世へ伝えていくことが大切だと思う。

戦争が起こらない平和な世界になることを心から願っている。